

[テキストを入力]

「子宮頸がんワクチン」から、インフォームド・コンセントを考えた

修士1年 萩谷 知怜

さまざまな当事者の声のなかから、特に私が興味・関心を持った、子宮頸がんについて学び、考察したい。

私は大学1年生のとき、テレビで子宮頸がんワクチンのCMを見て、ワクチン接種で防げるがんがあるということを知った。このCMでは、「子宮頸がんを100%予防できるワクチン」のようなイメージで宣伝をされていた。

市町村によっては、中学生のワクチンの無料摂取化が行われていることも耳にしていた。

看護師を目指していた学生として、「がん」というワードを聞いただけ、とても怖く、女性にしか発症しないがんでもあるため、未然に防ぐ方法があるのであれば、接種したいと思い、3回の接種を行った。

大学4年生になった際に、ニュース番組で、子宮頸がんの副作用で苦しむ子どもたちについて取り上げられるようになった。

予防接種を受ける際、副作用については紙一枚を出され、読んで、サインをするといった程度であった。インフルエンザワクチンのように簡単で、CMや予防接種の推進が行われている状況にあったため、受けることに抵抗や怖さは全くなかった。

しかし、ニュースを見て、万が一、自分が副作用を発症していたこと考えると、とても怖くなった。

ニュースではイメージしづらかった副作用のことや製薬会社、政府のことを、今回当事者の方の話を聞くことや、実際の映像を見ることを通して、このワクチンは予備知識なしで、気軽に接種してよいものではなかったということを改めて知る機会となった。

子宮頸がんワクチンの一番の問題は、基本的な情報が国民に与えられないまま、一方的に接種が呼びかけられていることにあると考える。

「ワクチンを打てば、安心出来る」「どうせ副作用がでるのはごく一部の人だ」という考えの人や、「重い副作用なんて、自分には起きないだろう」と思う方がほとんどであると思う。ワクチン接種を止める権利は誰にもなく、自分の身体は自分であり、自分の命は自分である。

しかし、これまでに、ワクチンをはじめとする、様々な薬害により重症とな

[テキストを入力]

った方、命を落とした方が存在するという厳然たる事実は消えることはない。私自身、安易な考えで受けてしまった経験から、ワクチンに対する認識があまりにも容易な社会になりつつあると感じている。

「ワクチン」という言葉にごまかされず、これまで慣れ親しんできた「常識」に基づいて情報を処理するのではなく、冷静な理性のもとに吟味することが、各人にとって良い選択に繋がるのではないかと今回学ぶことができた。

また、本来、人の命を守る役目を担うはずの医療機関が必要な情報を分かりやすく提供せず、良い面ばかりを伝えていたという事実や、ワクチン接種後、当事者達が身体の不調を訴え病院にいても、「学校に行きたくないでしょ？」「いい精神科があるからいけば？」というような医師の態度には大変驚いた。

いくら製薬会社や政府が推進しているからといい、その安全性が保障されているとは限らない。

ワクチンを打った側として、この薬品にどのような副作用があるのか、十分に把握しておくことや、患者を疑うのではなく、専門職として常に疑問に持ち、患者の傍に寄り添うような対応を取らなくてはならないと考える。

私は一人の医療者として、そのような対応をとると共に、インフォームドコンセントをするときには、良い面ばかりではなく、その危険性も十分に伝えたいと改めて考えさせられた。

さまざまな当事者の声を聞き、このような事実が存在しているということから、医療者として常にどう対応していくべきなのか考えて今後の勉学に励みたいと思う。